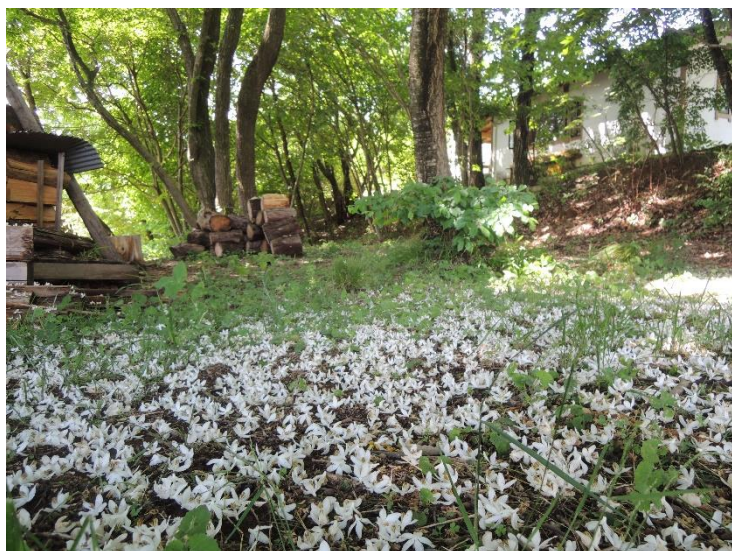


星 屑 の 林

牧師 山本 護



「わたしの父の家には住むところがたくさんある。もしなければ、あなたがたのために場所を用意しに行くと言ったであろうか。行ってあなたがたのために場所を用意したら、戻って来て、あなたがたをわたしのもとに迎える。こうして、わたしのいる所に、あなたがたもいることになる(ヨハ 14:2~3)」。

☆

前夜の雨でエゴノキの花がいっぺんに散って、特別にその時だけ、伝道所の一面が「星屑の林」になりました。通常、星屑のありかは夜空ですが、今朝、この林で、天と地が交錯していると思えば、イエスの約束とも重なる示唆的な光景でした。

1962年(昭和37)、三橋美智也が唄った『星屑の町』。民謡ウエスタンとか初の和製ポップスと呼ばれていますが、発声も節まわしも三橋の歌らしく、『哀愁列車』や『リンゴ村から』に連なる望郷ソングの仕立てじゃないか、と私は思います。

歌いはじめと結びが「両手をまわして 帰ろ 揺れながら 涙の中を たったひとりで」なのに、いったい何が『星屑の町』なのでしょう。よく聴いてみると二番の歌詞で分かります。「指笛吹いて 帰ろ 揺れながら 星屑わけて 町を離れて 忘れない 花のかずかず 顔を閉じて 帰ろ 思い出の 道をひとすじ」。

都会で一生懸命働いて、遠い旅程を夜汽車に揺られ、星屑の中を歩いて故郷へ帰るといふことなのでしょう。『仰げば尊し』のように「身を立て 名をあげ」の凱旋ではなく、「涙の中を たったひとりで」の帰郷。時代を超えて妙に胸打たれます。

イエスが先に行って、私たちのために場所を用意して下さっている御国。終りの日のことを語っているのですが、通俗的に、私たちが召される時にイエスが迎えに来てくれるイメージが浮かびます。「帰ろ 揺れながら 涙の中を たったひとりで」。いや、その時には独りではなく、イエスに同道してもらって帰りましょう。

「忘れない 花のかずかず」とは、ふり返れば指を折って数えられる都会での輝く出来事か。星屑の町に思いを残しながら、「両手をまわして 揺れながら」故郷へ帰っていく。都会とは地上、と読むこともできます。「顔を閉じて 帰ろ 思い出の 道をひとすじ」。林に降った星屑が、先に帰天されている人たちに思えました。Ω

